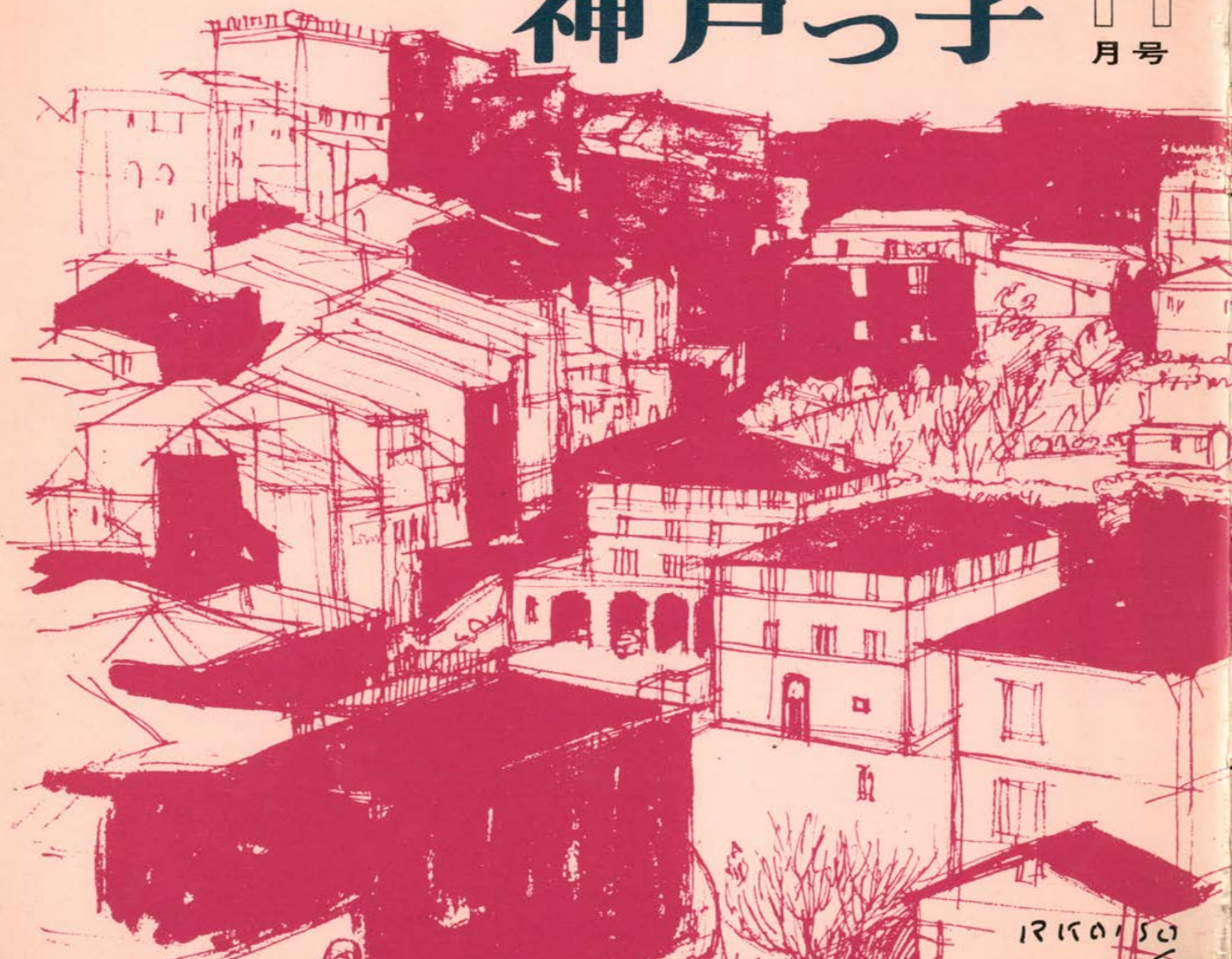


月刊「神戸っ子」昭和39年11月15日印刷通巻44号 昭和39年11月15日発行 毎月1回15日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

11
月号



IRIKAI SO

monthly magazine kobekko november 1964 no. 44

*For the best
Mikimoto Pearls
of course*

The Originator of Cultured Pearls

K. MIKIMOTO, inc.

KOBE STORE

Kobe Int'l House, Sannomiya

OSAKA STORE

Shin Osaka Building, Dojima

MAIN STORE : Ginza, Tokyo

TAX FREE FOR TOURISTS



世界で自慢のできる
日本の宝石は
〈ミキモトパール〉です
選びぬかれたつぶよりの
ミキモトパールが
あなたを気品で包みます



御木本真珠店

神戸店

三宮・神戸国際会館 Tel. 22-0062

大阪店

堂島・新大ビル Tel. 363-0247

本店=東京・銀座四丁目

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたの暮らしに楽しい夢をおくる

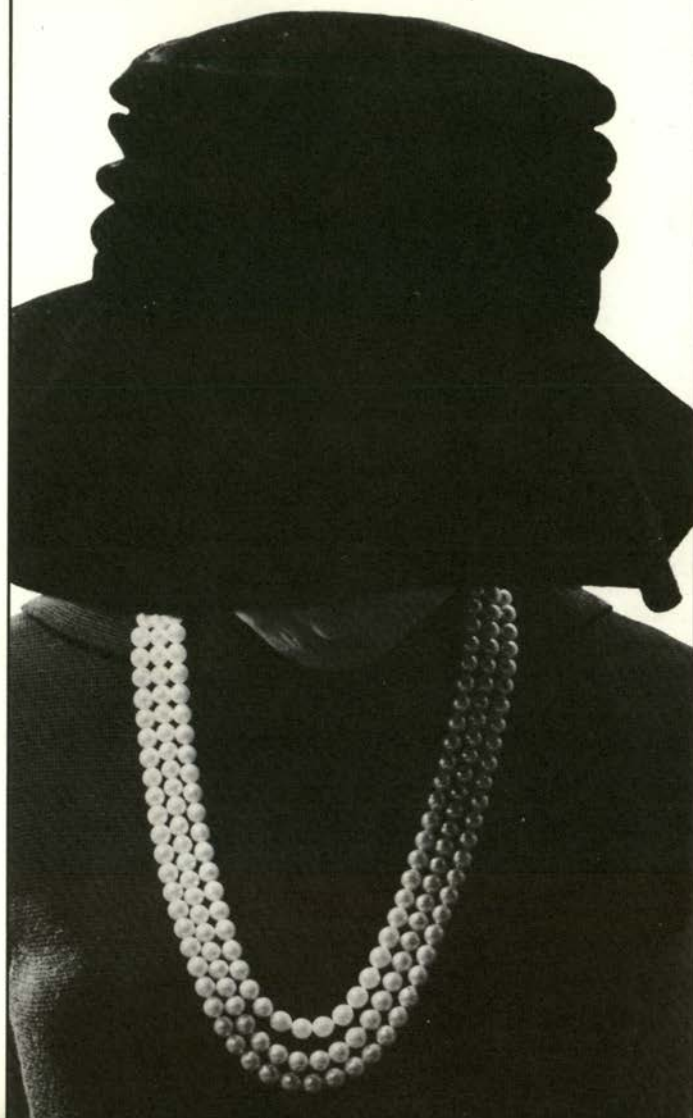
神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



目 3
0
hi
向 7
筋 2
宮 0
kyu
目 4
東 0
り 6
ori
街 1
上 8
xit
目 2
筋 2
筋 6
目 3
上 1
筋 4
筋 6

PEARLS
by
TASAKI



深まる秋
しずかにかがやく
あなたのパール

田崎真珠店

- 三宮店：新聞会館秀品店内
- ニューポート店：ニューポートホテル内
- 東京パールファーム：東京・赤坂溜池2
- 銀座店：東京・銀座並木通
- ヒルトン店：東京・ヒルトンホテル内
- オータニ店：東京ホテルニューオータニ内
- 羽田店：羽田・東急ホテル内
- 札幌店：札幌・ホテル三愛内

われら
神戸っ子

17

あか
ね
まつ
ほ
赤根待帆
赤根和生氏夫人
エプロン・デザイナ―

随筆家、岡部伊都子さんは赤根待帆さんのエプロンを「生活に密着した。実用品であって、しかも美しいものこそ、ほんとうに人の敬愛に価するものだ」とと激賞されている。待帆さんは赤根和生氏（美術評論家）夫人で、「昔からエプロンが好きで、カーテンでも何んでもすぐエプロンにしてしまふんです。いまは子供たちまで、エプロンおばさん」といふんです。いまは子供一の高台にある異人館に住んでいらっしゃる神戸っ子。10月23日、待帆さんの作品が「花のエプロン・ショー」として発表され神戸っ子の人気をさらってしまった。

（一の谷の赤根待帆さん宅の仕事場にて）

撮影 / 西村雅司



*猫眼石指輪

確信をもって
タジマの目が選んだ
世界の宝石の名品!

Tajima
宝飾店 **タジマ**

元町2・TEL 33 0387・2552



*ダイヤモンド指輪

野村 一高

医療法人 野村病院院長
兵庫県ドクタース・キャプテン

神戸のラクビー界の名門校、神戸二中（現在兵庫高校）の出身で、学生時代から、神戸二中チームのレギュラー選手として名声をほしいままにした。須磨の天神浜にある、野村病院の院長さんだが、毎年9月から4月頃にかけて、ラクビーのシーズンともなれば、休暇は殆んどラクビーに費し、グラウンド狭しと馳け廻っている。兵庫県ドクタースのキャプテンとして常時試合に出場、名キッカーとして恐れられている。関西ドクタース（惑惑会）のレギュラーでもある。また、神戸市立六甲工業専門学校（惑惑会）のチーム（昭和38年国体代表）の育ての親でもある。

（六甲工専グラウンドにて）



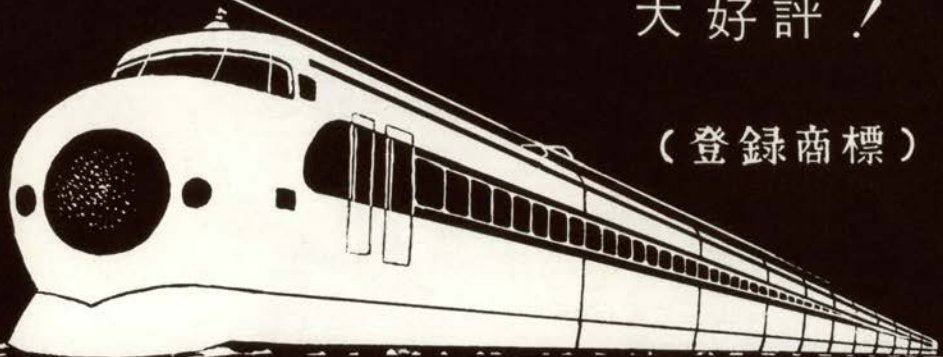
NAGOYA

TOKYO

ヒロタの新銘菓
世界に誇る夢の超特急

大好評！

(登録商標)



HIROTA

元町店 元町3丁目 ☎2340 三宮店 新聞会館秀品店 ☎2312
☎3523

KYOTO

OSAKA



11月号目次

- 1 Second Cover/絵・中西 勝
- 3 グラビヤ/われら神戸っ子・撮影/西村雅司
⑰ 赤根待帆 ⑱ 野村一高
- 9 わたしの意見/有岡信道
- 10 随想3題/館パン・十河 巖/コスモポリタンの町・田崎俊作/私の散歩道・古山桂子
- 15 随筆/読書の意味について・久山 康
- 17 連載随想第28回/わからない……・白川 渥
- 19 ヨーロッパ“気楽”な旅(その3)
水泳王国の夢よもう一度・古林喜楽
- 23 神戸っ子放談/森垣 茂
- 26 経済ポケットジャーナル
- 27 オリエンタルホテル・ア・ラ・カルト(その5)
- 29 るぼるたーじゅ・コウベ④神戸の大衆演劇
松原新一
- 34 映画のこと手当り次第⑩/淀川長治
- 36 こんにちわ船長さん/⑥アンドレア・ドリア号
船長 きく人・玉奥 章
- 38 神戸遊戯誌15/ヨット④・青木重雄
- 43 エプロンへのお誘い・赤根待帆
- 44 季節のモード・福富芳美
- 49 バリ通信(3)/バリっ子の胃袋・佐藤 昭
- 52 暮しのバラエティ No.9・毛皮
- 57 特集第1回/観光バスのゆかない神戸
- 64 ピンクコーナー(T)
- 69 神戸を楽しむ私のコース④小寺 巖
- 70 神戸うまいもん巡礼 No.27/赤尾兜子
- 72 紳士入門⑩/会議紳士・竹田洋太郎
- 74 ポケットジャーナル/花時計
- 76 Kobekko Shopping Guide
- 82 連載・第19回/神戸夫人・武田繁太郎
- 86 愛読者サロン
- 88 グラビヤ/プロムナード・コウベ/緒方しげを

表紙/小磯良平・撮影/米田昌弘・米田定蔵・レイアウト/橋正三

レストラン
コラル キタ/
TEL. 23-2251

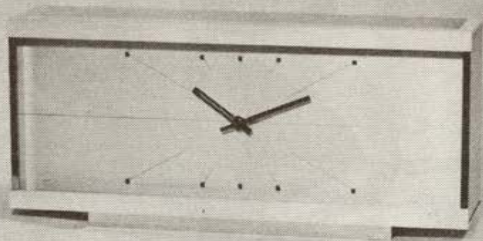


S I.

Kienzle

Made in Germany

光が時を動かす 光電時計



特約店



美田時計店

神戸・元町3丁目

TEL. 33-1798・8798

＊わたしの意見

みなと祭りに

アイデアを

有岡 信道

神戸市助役



最近、みなと祭りのあり方について、各方面からいろんな意見や批判が出ていますが、みなと祭りを少しでもよりよいものにしようという点で、いろんなご意見を寄せていただくのは非常にうれしいことだと思えます。

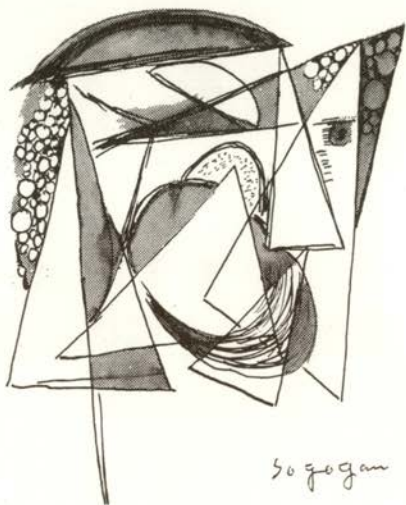
そして、その批判はだいたい次のような考え方にもとづいているように思われます。即ち、毎年同じようなことばかりやっているとか、マンネリズム化をどうやって防ぐかというようなことであり、基本的には私も全く同感です。

数年前に私は、仙台の七夕祭りを見に行ったことがあります。東京その他から多勢の人々が集まり、たいへんな賑わいぶりでした。このお祭りが、これほど全国的な名物になりえたのは、いったいなせだろう？ これは大正時代の中期に名物としてうたわれるようになった、比較的新しいお祭りですが、結局根本にあるのは、市民の盛りあがる熱意ではありませんまいか。

神戸も次第にお祭りが盛んになってきて、例えば各区ごとに独自のお祭りを催すようになってきたのは、そのあらわれだといえるでしょう。この傾向は、是非育ててゆきたいものです。また、お祭りのあり方が、時代とともに変化してゆくものだという点も見逃してはならないことで、おみこしをトラックに乗せて運ぶような方法が実際に採られている時代なのです。

だから、私どもとしても、みなと祭りを市民全部の方々のお祭りになりたい、そしてさらに、神戸でなければ見られないような特色のあるものになりたい、いつもそう願っているわけです。しかし、そのためにはどうしても市民の皆さんの熱意と協力が必要だと思います。みなと祭りの進歩のために、新しいアイデア、いいプランがあったら是非教えていただきたい。それが私の願いであり、希望なのです。今年でみなと祭りも32回目を迎え、さらに発展させていくために、批判と同時に積極的なアイデアを市民の皆さんから寄せてくださるようには、期待しております。

□ 随想三題 □



カット／十河巖

こういいかけると大変なパン通のように聞こえるかもしれないがロシア風の黒パンがどうの、ドイツ風のフスマパンがうまいとか、フランス風のトウモロコシパンはすてきなんだと、むづかしいことをいう人がおおいが、実のところ種類のおおいパンの中で、餡パンがいちばん好きである。

パンの中で最も日本民族の誇り高きパンは餡パンではないかと思う。

世界中の方々の国を訪れたが日本をおいては、絶対に餡パンは見あたりなかった。

同じ餡パンといっても、こちらこけた表皮のおへそに桜漬けがくっついていたり、ケシの実がパラパラと散っていたりするのはいったい誰が考えたのか、全くうまい趣向である。しかも餡パンには活動写真の中売りの餡パンや、遠足にもっていった少年の日の郷愁がたぶんひそんでいる。二年前に垂水のパンヤさんがお歳暮にデパートの包みをもってきた。

「そんなものいただくわけはありません」

と強くツツ返した。

「わざわざそんなお品を買って来ないでもお店の餡パンを下さる方がどんなに嬉しいかしれません

十河 巖

餡パン

「米のめしよりもパンの方が好きだ」

なんていおうものなら

「日本人のくせにいやなやつだね」

と言下にひやかされるぐらいがおちだろ。しかし、何年もジャワで生活をしていたり、何カ月もヨーロッパを旅行して、パン食をつづけていてもさして、自由を感じなかったところからすると、好きといってもまんざらうそともいえないだろう。

神戸にはうまいパンヤさんが方々にあるところからほかの都会にくらべてパンについてやかましい人が少くない。そんなひとにでっくわしてパン談義でも聞かされたすと、

「僕はパン職人をしてたことがある」

と高手びしゃに出て、通ぶった顔つきの相手をへこますことがある。事実、終戦直後、ジャカルタで捕虜になっていた間にパンヤで職人をさせられたことがある。パンをこねたり、薪木の火をひいたあとのパンガマにオールよりも長い棒の先にパン型をのせ、カマの奥の方にほどよく並べた経験もある。だからまんざら素人でもない。

とつけ足した。

「おやすいご用」

とひきさがって、一週間ほどしてからパンヤさんは

「館から、パンからぜんぶ特別に仕こんだもんでですから試して下さい」

と五つ五十個あまりの館パンをもつてきてくれた。

それ以来毎年、盆と正月には心ゆくまで館パンが食えることになった。

贈物にもつてくるつもりでつくった特別製の館パンが残ったので他のお客にも売ったところ、それがとてもうまいと大好評をうけてそれ以来特別の館パンを売りはじめたが、それがまた飛ぶようによく売れるようになり、ひいては店が繁盛しだしたということだ。

館パンは日本独特のパンである館パンめでたし。(随筆家)

コスモポリタン

の町

田崎 俊作

私は長崎に生れた。まぎれもなく九州男児である。もっとも今は神戸っ子を自認しているのであるが。

わが郷里長崎と神戸を比較してみた場合この二つの都市が、たいへんよく似ていることに気づく。どちらも港町である。また、港町に固有のエキゾチズムがあふれている点も両者に共通しているし、人々の気風のおだやかな点でも、極めて類似した性格が感じられるのである。

ただ、大きな違いは、お祭りである。長崎におけるお祭りというのは、実に派手ではなやかだ。どういうわけで、お祭りにこんな精力と大金を使うのだろうか、と呆れるくらいのものである。その点神戸の港祭りは、ずいぶん静かなお祭りのように思う。

よく趣味は何ですか？ と訊かれる。そのたびに困惑するのだがしかたがないので、日本画の鑑賞ということにしている。3、4年前には、展覧会などをよく見に行つたものだった。商用でしばしば東京へ出るのであるが、その折りにときどき画廊をのぞいたりもする。すぐれた絵を見てみると、気がすつとしてくるのがうれしいのである。

真珠の需要の深さ、厚さという点では、神戸よりも東京の方がすぐれていることはいうまでもないが、しかし港をもつという立地条件からいって、真珠の輸出に関し

ては、はるかに神戸の方が恵まれているといえよう。伊勢も近いし、工場をつくるのも東京におけるよりはやさしいはずである。ただ、神戸にやすわつたまま、外へ出ないというのでは、経営者として視野が狭くなる恐れがある。私がいざしば東京に出て、いろんな人に会って話をする機会をもっているのも、それによってなんらかのよい刺激を受けたいと思うからである。

仕事の関係もあって、外国人と交際する機会が多いのだが、その経験からいって、外国人はおおむねビジネスライクである。日本人の場合だと、やれ接待だ、なんだということとでさういうつきあいがうるさいのだけど、外国人相手の場合は、あまりそのへんの気がつかないがいらぬのである。たまに六甲山へ案内してあげるくらいで、それもたいていが家族ぐるみのつきあいになる。向うも家族づれ、こちらも家族づれで、ということだ、それを外国の人は好むようなのだ。

私は、こんなことを考えているいちど、市長、知事、経営者、文人などが集まって、神戸に関したテーマについてセミナーを開いてみてはどうだろうと。各界で活躍する人々の相互交流をつうじて

お互いに勉強するのは、なかなかいいことではないかと思うのである。

また、神戸はやはりコスモポリタンの町であってほしい。そこに神戸の特色があったと思うからである。
(田崎真珠KK社長)

私の散歩道

古山 桂子

仕事の関係で、歩き回ることが多い。

セカセカ動き回っているせいかたしかに前に一度通ったのに、あのときはなんの用事だったかなあと考え込むことがある。私の方向オンチは知れわたっていて、私の書いた地図はあまり信用がない。考え込むのも、あながち「セカセカ」のせいばかりではないらしい。

考えてみれば、神戸に住んで七年、「場所は山側ですか」とか「そこは駅の東側？」などと人に聞けるようになったのは、私が神戸の人間になった証拠かな、とも思う。私の生まれ育った東京は、目標

になる山も海も見えないのだから一度電車やバスに乗ったが最後、それこそ西も東もわからなくなる東京で西だ東だと言ったところでなんの役にも立ちほしない。まるで「くらげなすただよへる」ような、とらえどころのない奇妙な町なのだから。生まれてはじめて、東西南北をしつかり頭にたたき込まれたという意味でも、方向オンチの私は、神戸に感謝しなければならぬだろう。

兵庫県の県庁所在地は、姫路かな、それとも神戸かななどと考えながら神戸へ来たのだから、まことに申しわけない。そんな私にはじめて六甲登山口から港の方を見たとときの印象がまだ鮮明に残っている。なにしろ、目の高さに海が見えるのだ。大型の貨物船もいっしょに、海全体が盛り上がりていまにも海の水が足元までなだれ込みそう、ギョッとしたものだ。ふり返ると、山が思いがけない近さに迫り、付近の家には濃いピンクと白の爽竹桃がまっ盛りだったバスの道には柳の木が、肩にかかるとくらくらに枝を垂れていた。道は白くて、土は砂のようにさらさらしていた。すべてが、北の方の荒っぽい自然しか知らない私には馴染みのない風景だった。植物図鑑でしか見たことのない

その花を、これが爽竹桃なのかと思いつきながら、まるで異国に一人で放り出されたように心細かった。

やがて、このあたりに住み馴れて、阪急の六甲から篠原本町を通って、青谷、布引と通るバスの道もすっかり親しいものになった。春、ミモザが黄色い花を散らし篠原本町の護国神社の桜が開きはじめると、朝の通勤電車をバスにかえる。秋、六甲や摩耶の木々が色づきはじめると、またバスに乗る毎日ゴタゴタ過している私には、散歩道といって別れないし、しゃれた犬を連れて歩けるご身分でもないから、いわば、このシーズンのバスが私の散歩道といえるのかもしれない。

小さいとき、通学のコースにお茶の木垣根のある家があって、小さい白い花が咲いていい香りする季節になると、わざわざ回り道のその家の前を鼻をピクピク動かしながら通ったものだ。

馬令を重ね、いい年をして、やっぱりそんな物好きなケセは抜けないものらしい。しかし考えてみると十五円のバスで廻り道なんて、子供のころにくらべてどうも人間が無味乾燥になってきたようだ。
(神戸新聞芸芸部)



レーヤードルック!!

タートルネックとローボタンカーディガン
クルーネックとフーデッドジャックなどの
ニットとニットの重ね着、これが
今冬のニュールックです。

男の服飾

MAC **マック**

三宮本店	神戸センター街 TEL 0895
トアロード店	センター街西口 TEL 0896
新開地店	新開地本通り TEL 05 7688
姫路店	姫路駅デパート TEL 03 1261

Faehreim's

ドイツ菓子

吟味された材料に
洗練された技術を
加えて“生”の持味
を十分に生かした
お菓子です。

ピラミッド
ビスケット
各種ケーキ
各種詰合せ

ユ-ハイム

本 店・三宮生田神社西隣
三 宮 店・大丸前 市電筋
神戸そごう・神戸三越・神戸大丸
国際名菓・その他有名百貨店



O-SHIBATA



柴田音吉洋服店

神戸・元町通4丁目 神戸 34-0693
 大阪・高麗橋2丁目 大阪 231-2106

KITAMURA PEARLS

世界の人々に
 愛される
 キタムラパール



北村真珠株式会社

神戸：元町店 TEL (33) 0072
 オリエンタルホテル店 338111E X T. 331
 東京：スキヤ橋店 TEL (571) 8032

読書の

意味について

久山 康

先日新聞に佐々木邦の逝去の報知が出た。

私はそれを見ながら中学に入学した頃のことをなつかしく思い起した。というのはその頃佐々木邦が或る少年雑誌に「地に爪跡を残すもの」という連載小説を書いていて、私たちはそれを毎月愛読したことがあったからである。何という雑誌に連載されたのか、筋がどうであったのか忘れてしまったが、少年たちのみずみずしく初々しい友情と異性へのほのかな慕情が、清潔でユーモラスな筆致で生々と描き出されていて、私は毎月読み切るのが惜しいような思いで読んだのを思い出す。私はそのとき読書のよろこびというものを、意識もせずに満喫していた。そして中学の初めの頃の思い出には、佐々木邦のこの小説を読んだときの心の弾みがいとも甦ってくるのである。

私は読書は楽しいものだと思う。それがどのような意味を持っているかを考える前に、それがなかつたら人生はどのようにに淋しく貧しいものにな

るだろうと思う。中学時代からさらに溯って、

「赤い鳥」という雑誌の童話やアンデルセンの童話、アミーチスの『クオレ』、そして立川文庫の流れを汲む英雄豪傑の物語を取除いたら、私の幼年期少年期はどんなに無内容なものになったかと思う。それらが幼い私の生活に深い感動を与えてくれただけでなく、それが今日の私を培ってくれたのだと思うのである。「三つ子の魂百まで」という言葉の真実を、五十に近づいて私はつくづくと思うのである。

この夏、高見順氏が喉頭癌になって作った「死の淵より」という一連の詩を「群像」の八月号で読んで、私はそれを一層強く感じたのである。そこに「文士というサムライ」という詩があった。「豪傑という者がいたと中野重治は詩に書いてわかしの豪傑をたたえた 余もまた豪傑を礼讃する 余は左様豪傑にあらず されど文士というサムライなれば この期に及んで ジタバタ卑怯未

練の振舞いはできぬ さあ来い 者ども いざ参れ 死の手下ども 殺したくば殺せ 切りたくば切れ 汝らをエイヤアと退治ることはできぬ 逆に悪玉のようにバツサリと切られるであろう : こういふ言葉がそこにあった。東大の英文科を出たインテリ作家の高見氏が、癌になったときその心を支えたのが、幼時に読んだ豪傑の物語であるように見えるのが、私の心を強く打ったのである。

私たちは読書を通して間接的に人生を経験する小説であれば筋の展開につれて未知の人生が展げ主人公の運命に引き込まれて、一喜一憂しながら未知の人生を感情をこめてかなり主体的に経験するのである。そして私たちは数日の中に一つの小説を読み終ることによって、一つの人生を誕生から死まで経験した深い思いを心にいだくのである。そういう経験が度重なり、私たちの心の中には幾つかの人生の影像が累積し、その一つ一つが複雑多岐の人生の各象面を浮び上らせて、私たちに人生を展望させ、凝視させ、人間の真実な生き方というものを徐々に開き示してくれるのである。

しかし読書の楽しさは、それが自分一人の単独の行為であり、この世の雑駁な生活の中で自己を失っている私たちに静縁ぎざぎざを与え、自己を回復させ成長させる作用をもっているところにあると思う。「本を読めば冬の夜も恵みある美しい夜になって神聖な生命が手足を温めます」とゲーテは『ファースト』の中に記しているけれども、多忙の中にも寸暇を得て、独り静かに本の頁をめくる

ときの清々しく心の満ちる歓びは、他にかけ替えないものである。そのときもし心に浮んだ感想を書きつけることをするならば、受動的読書は能動的な創作の契機を加えて、心のよるこびは倍加するのである。私たちの机の上に読書ノートが幾冊も積み重ねられ、そこに魂の成長の歴史が刻まれるようになるなら、私たちの人生はどのように豊かなものとなるであろうか。

しかし読書の意味を煮詰めるならば、人に邂逅する、すなわち、人にめぐり逢うということではないかと思う。人生を深く生きた人は殆んどといってよいほど、「私はあの人に相逢って初めて人生が分った」という感動を終生心に秘めているものである。それが読書を通して起るのである。例えば西田哲学の名で知られている西田幾多郎博士の書物を通して、自分の一生の方向を決した人は多い。三木清が『善の研究』を読んで哲学を一生の仕事としたことはよく知られているが、西田博士の真の後継者である京大の名誉教授西谷啓治博士も『思索と体験』で人生の師に出逢った人である。「自分を登高へ誘うもの、自分にとって自身に至る道になるもの、真実の意味で師であり得るものに出会うということ、稀有な仕合せである。私一個としては、たまたま『思索と体験』を手にしたということによって、そういう仕合せに廻り合ったという感を深くもつものである」。西谷博士はこう述べられているが、私たちの読書はこの人生の師への邂逅にまで徹しゆかなければならないのだと思うのである。

わからない

白川

渥

え・中西

勝

×
このところ、私は殆ど映画館へは行ったことがない。観たいと思う映画がないでもなかったが、そのレジャーの時間を全部ゴルフの方へふり向けた恰好である。作家稼業の上から言えば、ゴルフよりも映画の方が仕事の上に役立ちそうだ。その勉強を怠けてしまったのは、むろん絶大なゴルフの魅惑のためだが、とは言え、あながちそのせいばかりでもない。セックス映画が野放しの現在街で最も不潔な地帯は、映画館街である。白昼の街



頭に立ちならんでいるあの臆面もない看板、あの恥知らずの宣伝文句。そこは、最も薄ぎたない臭気の立ちこめている都会の恥部である。むろん、私はビュリタンでもモラリストでもない。いや、稼業柄、人一倍、人間の薄汚なさや暗黒面や悪魔性と付き合っている人種である。ありようは、だからこそ、もうタクサンだと言う気がするのだ。

牡丹（ほうたん）の一つの花を見つくさず
誰の匂だったか、そんな秀吟がある。産婦人科

の医者の中には、案外に高雅な趣味の人が多いそのだ。現に私の知人の老産科医も、バラづくりの名人だ。人間のバラばかりを見つめているやりきれなさが、この人にこのような視点転換をはからせたかと、忖度してみたりする。都会の恥部からはればれとした緑のコースへ……言うならば、私のゴルフ行きもそんな同じ反作用かもしれない。

×

映画は観ないが、テレビの方はよく観る方だ。うっかりすると、最終番組まで付き合ってしまった。私の好きなプログラムはノンフィクションものとスポーツである。ドラマは時代ものばかり。現代ものは稼業の役に立ちそうだが、これも全く不勉強である。

私は、「藤村」時代からの阪神ファンだったが、隣家にスタンカ君が引き越して来てから南海ファンになった。はじめは近所付き合いと言う程度の応援だったが、だんだん文字通りにファンティツクになった。今年の阪神南海優勝争いがつづいた前後十日ばかりは、全く仕事が手につかず、「近所迷惑」とはこのことかと苦笑したものである。いつの頃からか、私は又相撲気狂いになった。たぶん「若ノ花」が関脇になった頃からであろう。彼が負けた日は愴然として夕食も喉を通らぬあんばい。ここぞと言う一瞬、つい大声を発して怒鳴ってしまった。あまり怒鳴りちらすので、家人から他所での観戦を禁じられている始末だ。ファン心理とは、いったい何であろう。この非合理な心の傾斜は、愚かでもあり、哀れでもある。まるで運命共同体である。その若ノ花と、彼が大坂場所で優勝した時、「大相撲」誌の依頼で一対談したこ

とがある。ミナミのさる料亭だったが、私は柄にもなくテレしてしまった。宝塚ファンなるものが踊り子に血道をあげている図もコッケイだが、少女のようにあからんだあの夜の私も同じ部類で、全くザマアなかった。

×

ノンフィクションものに「夫婦善哉」や「おのろけ夫婦合戦」と言ったユカイな番組がある。あれに出場する夫婦の気持がわからないと人は言う。一種の露出狂だろうと言う説もある。私も首をかしげる一人だが、いや待て、作家などという人間にも、多少はその症状がありはしないか。マスコミの註文に応じて、すっ裸のアクロバットを演じている文学は論外だが、純度の高い文学には、共通して何らかの自照的告白的要素がある。作者が己れをマナイタに載せてゲロゲロを吐いてみせる私小説など、偉大なる露出症状と言うべきであらう。

現代もののドラマは観ないが、いま十チャンネルでやっている「風来坊先生」だけは、原作者としていやでも付き合わざるを得ない。あまりにも原作のイメージとはかけはなれたドタバタ劇である。原作者のあずかり知らぬ場面が続出してくる。聴視者からおかど違いの抗議の手紙が私の方へ舞い込んだりする。好きな「私の秘密」と同時刻なので、ちよいちよいその方へダイヤルを廻したりするほどのユウツな一時間だが、先日来宅したプロデューサーの話では、意外にも、この番組の視聴率が甚だ高いとかで、三ヶ月の予定が五ヶ月に延びた。わからない。……

(作家)